

短編 2 本立て「タラン級巡洋艦危機一髪」「アンリの日記」【第一稿】

遠野 秋彦

ガルマン人のアンリは日記帳をもらった。

はじめての日記帳だった。

喜んでアンリは日記を書き始めた。

初めての話題は、知人の家の地下室で見つけたヘンリーという名の旧式宇宙船の残骸であった。

しかし状況は予断を許さなかった。

アンリ一家は、ボラーのシャルバート信者狩りから隠れるようにひっそりと暮らしていたからだ。

同じ頃。

ガミラスではデスラー紀元 102 年であった。

ガミラス星のマンセル・ブリッジ近くにあるトラフィック・ミュージアムをデスラー総統は見学していた。

「タラン」

「はっ、総統」

「この不細工な旧式宇宙船はなんだ？」

「ガミラスで初めて宇宙飛行を行ったアンリ・ガルマン宇宙船です」

「アンリ・ガルマンとはなんだ？ 人の名前か？」

「ええと。アンリというガルマン人が作成した宇宙船を輸入したとあります。ガルマン本国での名称はガルマン III ですが、輸入した機体はアンリ・ガルマンと呼ばれていました」

「ガルマン人とはなんだ？ どこかにガルマンという国家でもあるのか？」

「ガルマン民族という民族が銀河系にあり、彼らが建国したのがガルマンです。基本的に我々ガミラス人と祖先を同じくする民族だと言われています」

「他の星の宇宙船を輸入したのはガミラス精神に反するが、祖先が同じ

と聞くと怒りも和らぐな。しかし、ガルマンという国家の話は聞いたことがないぞ」

「既に存在しません」

「なぜだ」

「ボラー連邦に併合されて、国家としてのガルマンは既に存在しないそうです」

「祖先が同じなら放置もできぬな。いつか、艦隊を差し向けてボラーからガルマン人を解放してやろう」

「しかし、今は銀河侵攻作戦の準備段階で地球攻略の作戦中です。いかに大ガミラスといえど、そこまでのゆとりは……」

「分かっている。いやまて、計画はデスラー総統の地球への移住計画に変更しよう」

「そ、総統!」

「ガミラス星の寿命はもうすぐ尽きる。しかし、他の移住先候補は全てキャンセルだ。地球に行くぞ、タラン。そして銀河系の地球を拠点にガルマン人を解放するのだ」

「ははっ」

タランは頭を下げた。

「しかし、やはりこの古くさい宇宙船は邪魔に見えるな。展示から外しておけと博物館員に言っておけ」

その日からアンリ・ガルマンは展示から外されて破棄された。

しかし、デスラーの望みが叶ったのはそのことだけだった。

地球攻略は失敗し。そこを拠点に行うはずのガルマン解放も実行できなくなったからだ。

デスラー紀元 106 年。

デスラーは、新天地を求めて宇宙を彷徨っていた。

乗っているのはデスラー砲装備の戦闘空母。

既にガミラス本星はなく、イスカンドルも消えた。

新しいガミラスを建国するとは言ったものの、デスラーの本音は戦争の愛好にあった。要するに戦いたいだけだ。

しかし、戦いなどそう簡単にそのへんに転がっているわけではなかった。

特に、デスラーでも勝てる相手という条件が付くと難しかった。

ボラーや暗黒は大勢力過ぎて味方もないデスラーの手には余った。

無駄な戦いは古代が好まないだろうことは良く分かっていたので、地球の援助も当てにできない。

その時部下が報告した。

「救難信号を発信している旧式船が漂流しています」

デスラーはそれに取り合うのが面倒だった。「このあたりならボラーの貨物船か何かだろう。放っておけ」

「それが、信号はボラー式ではないのでして」

「なんだと？」

「自分が知っているどの方式にも当てはまりません」

「とにかく収容しろ」

戦闘空母の甲板に載せられたその宇宙船は、乗組員が【見たことが無い】
【見たことが無い】と騒いでいたが、デスラーは見たことがあるような気がした。

「そうだ。あれはアンリ・ガルマンだ。タラン、そうではないかね」

「アンリ・ガルマン？」

「トラフィック・ミュージアムにあったではないか」

「ああ、あのアンリ・ガルマンですか。言われて見れば似ています。想像を絶する古さです」

「すぐに調べろ。救難信号は未知なのではなく、あまりに古いガルマンの形式なのではないか？」

タランが慌てて古い資料をめくった。

デスラーの予感 は 事実として確認できた。

信号は古ガルマン式で、収容した旧式宇宙船はガルマン製のとても古いものだった。

乗っていたのは日記を抱えた少女が一人だった。

デスラーはすぐに会うことにした。

退屈だったからだ。

「私はデスラーだ。君は何者だね？」

「アンリと言います。ガルマン人です」

「アンリ・ガルマンに乗ってきたのがアンリとは出来過ぎだな」

「いえ。あれはヘンリーです」

「アンリではないのか？」

タランが耳打ちした。「総統。ガルマン訛りではアンリはヘンリーと呼ぶのです」

デスラーは頭を切り換えた。

「分かった。宇宙船の名前はこの際どうでも良い。おまえはなぜあの宇宙船で宇宙を漂っていたのだ？」

「ボラーのシャルバート信者狩りから逃れるためです」

「シャルバートとは？」

「ガルマン人が信仰するマザー・シャルバートのことです」

「ふむ。シャルバート信者狩りとは要するにガルマン人の弾圧のことなのかね？」

「そうです。私の家族はずっと、とある人の家に隠れ住んでいました。その間、地下室にあったスクラップを修復して宇宙に飛び出したのです。その過程はこの日記にすべて書いてあります」

彼女は表紙に【アンリの日記】と書かれた日記を開いて見せた。

文字がびっしり書き込んであった。

「なるほど。ボラーも旧式すぎて、アンリ・ガルマンまでは接收しなかったのか。それで家族は？」

「死にました」

「家族が死んでまで君がここまで来た理由は何かね？」

「祖先を同じにする別の民族が大マゼラン星雲に健在だと聞きます」

デスラーとタランは顔を見合わせた。ガミラス人のことを言っているら

しい。

「彼らはまだボラーの配下に接収されていません。彼らに助けを乞いたいと思います」

デスラーはニヤリと笑った。

「タラン。次の戦争が決まったぞ」

「総統。まさか!」

「そうだ。ボラーからガルマン人を解放するのだ」

「しかし。大勢力のボラーとは戦わないと決めたはずでは」

「タラン。1つ忘れていることがあるのではないかね?」

「忘れていること?」

「我々も大帝国だ」

「それは過去です」

「いや。人材が足りないだけで、未だに大帝国だよ」

デスラーが目を閉じて指を鳴らすと、デスラー戦闘空母の周辺に次々とガミラス艦がワープアウトしてきた。

「宇宙艦の無人製造プラント惑星の全てが止まったわけではない。戦力は既に回復している。足りないのはこれを動かす人材だけだが、解放したガルマン人が乗って運用してくれるなら問題は何もない」

アンリが顔を真っ赤にして立ち上がった。勢いでイスが倒れた。

「まさか。あなたは!」とアンリが叫んだ。

「そうだ。大マゼラン星雲の覇者、君たちと祖先を同じくするガミラス人の総統、デスラーだ」デスラーはマントをひるがえした。

「デスラー総統!」アンリの目はハートマークになっていた。彼こそはアンリが待ち望んだ解放者だったのだ。

まさに、ボラーに対するデスラーの快進撃が始まった瞬間であった。

このとき、まだデスラーもアンリも、もちろんタランも分かってはいなかった。

ガルマン人が信仰するシャルバートという神と、自ら神になろうとしたデスラーが相容れない存在であることを。

だからアンリは日記に書き込んだ。

マザー・シャルバートよありがとう。私をデスラー総統に会わせてくれて。

本当なら、マザー・シャルバートの最大の天敵がデスラーであるが、まだこのときは表面化していなかった。シャルバートとデスラーの対立が深刻化するの、は、ガルマン・ガミラス帝国が建国されたあとのことであつた。

アンリの日記がデスラーを称える文言で埋め尽くされた日々から、デスラーを呪う言葉で埋め尽くされる日々が変わるのは、その後のことであつた。

そして、アンリはデスラーも知らぬ間にガルマン・ガミラス帝国のシャルバート信者狩りに発見されてガス室送りになっていた。しかし、デスラーがそのことを知ることはなかった。その前に、異次元から出現した銀河のせいでデスラーパレスが減んでしまったからだ。

アンリが乗ってきたアンリ・ガルマン船は、一度は役に立たないとして廃棄されたが、それを知ったデスラーは怒ったという。アンリ・ガルマン船はその後回収されて、ガルマン・ガミラス帝国のグロース・ブルクに設置された新トラフィック・ミュージアムに展示されたというが、これも異次元から出現した銀河のせいで崩壊して消えたという。

おわり

軽巡洋艦タランはワープを終了した。

タランは、タラン級軽巡洋艦の1番艦であり、名前にデスラー大統領のガミラス時代からの忠実な側近を当てたものだ。

当然、側近の名前を冠する程の画期的な最新鋭艦だった。

しかし、この最新鋭艦は主戦場ではなく深宇宙の国境策定任務に投入されていた。

理由は簡単だった。

デスラー大統領は思い入れの深い側近の名を冠した宇宙艦を、最前線で即座に失いたくはなかったのだ。

それにもう1つ重要な問題があった。

最前線は味方も大軍なので、何かあってもすぐに増援を派遣できた。

しかし、深宇宙の国境策定任務は孤独な任務であり、しかも武力衝突が付きものだったからだ。貧弱な旧式艦よりも、新型艦を派遣する意味があった。

タランの艦長ランカンは、ブリッジの艦長席でホッとため息を付いた。

「ワープが無事に終わって良かった」

「祝杯はまだ禁止です」と副長のタラが振り返った。「理由を付けていつも酒を飲むのは悪いクセです。今度はワープ終了記念で新しいボトルを開けるつもりだったのでしょう？」

タラは美しい女性だった。

ガルマンの軍服が似合っていた。

「そう言うな。ここまで星の少ない宙域にまで出ると艦長の仕事などは残っていない。航海士と測量技師がいれば仕事は終わる」

「それでも、未知の敵が出現する可能性はゼロではありません。そのため艦長でしょう」とタラは怒ってみせた。

「オペレーター、周囲に敵の気配はあるか？ 未知天体、未知勢力などの

気配もありそうか?」

「ありません。既知の小岩塊が1つ浮かんでいるだけです」

それは無視しても良かった。

ガルマン・ガミラスの規定によれば勢力下の恒星から12光年が領宙と定められていたからだ。恒星の以外の天体は、航行の安全のために記録を要したが、国境策定には関係しない。12光年の例外事項はいくつかあった。たとえば、別勢力の恒星と接していた場合は両者の中間点に国境を引くことになっていた。しかし、このあたりの恒星もまばらな宙域で、他の恒星との間に中間線を引くような面倒な事態は起きそうになかった。

この恒星起点主義による領宙の策定は、ガルマン・ガミラスのみならずボラー連邦でも行われていて、当面は有効に機能していた。

より正確に言えば、ボラー連邦の版図を奪い取って建国したガルマン・ガミラスが、ボラー連邦の恒星起点主義を踏襲したと言って良いだろう。

しかし、このあたりは旧ボラー勢力下に近いとは言え、完全にガルマン・ガミラスが掌握しており、ボラーと事を構える最前線からも遠い。問題など起きると思えなかった。

「問題が起きそうにないから、やはりワープ終了記念に酒を飲むよ」

ランカン艦長が艦長席から立ち上がり、タラ副長は可愛い顔で彼を睨んだその時、誰も予測しなかった事態が起きた。

未知のエネルギーのビームがタランに撃ち込まれてきたのだ。

ビームは外れたがランカン艦長は艦長席に戻って指示を出し始めた。

「今のは何だ。すぐ調べろ。全艦第1種警戒態勢。交戦も覚悟しておけ」

それから艦長は副長を見下ろして命じた。

「ボラーか?」

「いえ。ボラーのビームはこういうエネルギーではありません」

「副長は謎のビームの分析を頼む。ボラーではないなら誰が撃ってきたのか知りたい」

「了解です」タラ副長は敬礼してそのままコンソールに向き直った。

「艦長」と通信士が叫んだ。「ボラーの周波数で通信が入っています」

「どういうことだ?」

ランカン艦長は眉をひそめた。

ビームはボラーが使っているエネルギーのどれでもなかった。

だが、周波数はボラー。

「とにかくつなげ」と艦長は命じた。

詭りの多いボラー語で通信が送られてきた。

「ここは暗黒星団帝国の領宙である。直ちに立ち去られよ。最前のビームは警告としてわざと外した。我々には貴艦を撃沈できる能力があり、このまま貴艦が測量行為を続けるならば暗黒星団帝国への敵対行為と見なし、攻撃を行う」

馬鹿な。ここはガルマンの占領地だ。

他の勢力が領有を主張できる宙域ではない。

そのはずだ……。

しかし、「そのはず」がよく裏切られるのが国境線の確定作業だ。

「計測班、敵の所在は掴めたか?」艦長は質問した。

「はい。巡洋艦クラスの戦闘艦が一隻。その後に測量船団と思われる小型船数隻が続いています」

「タラ。戦ったらどうなりそうだ?」

「敵の巡洋艦クラスは、未知の装甲で覆われているので何とも言えません。おそらくタランの主砲でも貫通できないかと」

「測量船の方はどうだ?」

「装甲はありません。おそらくタランの主砲で貫通できると思います」

「敵の測量は妨害できるが、こちらは負けそうか……」

「側近タランの名を冠したこのフネは沈めるなというのがデスラー総統の厳命です」とタラは言った。「交戦は避けた方がよろしいかと」

「そうだな。ではガルマン・ガミラス宇宙軍士官としての第2の責務を果たそうか」艦長は言った。

「第2の責務とは?」

「外交官として振る舞うのだよ。通信し、ボラー語で返答しろ。測量作

業は即座に中止する代償として、我々は話し合いを希望する。この条件が受け入れられない場合、我々は後続の測量船を砲撃する。以上だ」

「返答が来ました。承諾するそうです」

「では外交の始まりだ。タラ、彼らは何者だと思うかね？」

「ボラー語を使っている、ボラー人ではないでしょう」

タラは未知の相手に不安げだった。

謎の相手の使節団が搭載艇でタランに到着した。

「このフネはボラー艦に似ているが、ボラー艦ではないな」とリーダーらしい男が艦内を見回しながらボラー語で言った。

「はい。本艦はガルマン・ガミラスの巡洋艦タランです。ボラーから奪ったドックで建造しましたので、倉庫に残ったパーツをかなり使っています。ボラー艦に似ているのはそのせいかと」ランカン艦長がボラー語で説明した。

「ガルマン・ガミラス。そんな勢力があったのかね？」

「最近、ボラーを駆逐して成立した国家です。かつてのボラーの領土の一部はガルマンのものです」

「では君のボラー語がたどたどしいのは母語ではないからだな？」

「それはお互い様でしょう」

「では交渉の前に自動翻訳機にお互いの言語を学習させよう」

「良い提案です」

未知の相手のリーダーは部下に指示した。

「それより貴艦の所属と名称もお教え頂きたい」

「暗黒星団帝国巡洋艦グロスター。艦長のグロイザーだ」

「暗黒星団帝国……。聞いたことがありません」

その時、タラがランカンに耳打ちした。「その名前には聞き覚えがあります。デスラー大統領がガルマン・ガミラス成立前に戦った相手です」

なるほど。

ガルマンからは未知でも、ガミラスからは因縁の敵か。

しかし、新しい戦争を始めるな、というのは出発前に厳命されたことであった。小数の惑星だけを支配する小蛮族ならばともかく、大帝相手には戦争をする余力は今のガルマン・ガミラスには存在しない。ボラーとの戦争で手が一杯なのだ。

同時に、領宙は何があっても1光年たりとも他人に渡すなどとも言われている。脅せばいくらでも領土を割譲する相手と思われるのは良くないのだ。

自動翻訳機の調整が終わると、艦長室で交渉が開始された。

「まず前提を確認したい」とランカンと言った。「我々としては、できれば戦わずに問題を解決したい。戦闘は最後の手段だと考えている」

「我々もそうだ。グロスターが戦って負ける事態は考えにくいだが、非武装の測量船団を率いている。丸腰の彼らは、どれほど野蛮な戦闘艦と遭遇しても一瞬で壊滅だろう。それは避けない」

「ではおそらく問題の焦点は、現在我々がいる宙域の領有権の解釈の違いにあると思う」

「話を聞こう」

「ここは暗黒星団帝国の領宙だと貴官は主張したが、専属の測量船団を率いている以上、測量ミスと言うことは無いだろう」

「ミスが無いことを確認してから警告射撃を行った」

「だが、こちらの法律からすると、ここはガルマン・ガミラスの領宙なのだ。測量を行う正当な権利がある」

「なるほど。ここでこのフネを沈めるのはたやすいが、報復として大艦隊が来るというわけですね」

「そう解釈されてもけっこう」

実際には大艦隊など来ないがな、とランカンは思った。ガルマン・ガミラスの戦力不足は深刻なのだ。現有の艦艇を多数最前線から引き抜きてこちらに派遣できるわけではない。

「では我々の戦いを始めましょう」とグロイザー艦長は言った。「いかに双方の面子を潰さずに国境線を引き直せるか。まずはここがガルマン・ガミラスの領宙だと主張する根拠をお聞かせ頂きたい」

「ガルマン・ガミラスが採用しているのは、ボラーと同じ恒星起点主義です。版図の恒星から 12 光年が領宙です。恒星と恒星が近い場合はその中間点が境界になります。ここは我々が領有する恒星系 C6248 から 12 光年以内なので、我が国の領宙と見なされます」

「C6248 とは？」

「この星です」

ランカンが星図で恒星を指さした。

「なるほど」グロイザーはうなずいた。「では我々がここを領宙だと主張する根拠も説明しましょう。我々はボラー連邦との間で幾多の戦いを行い、最終的に休戦協定が結ばれました。その際に国境線を画定する作業が行われて、お互いの版図の中間にラインが引かれました。その際、C6248 はボラー領でも暗黒領でもなかったのも、無視して線が引かれました」

「そうです。C6248 はボラー領ではなかったが、ガルマン・ガミラスが占領してガルマン・ガミラス領を宣言しました」

「なるほど、状況が見えてきましたな。我々はあくまでボラーが相手だと思っていたが、いつの間にかガルマン・ガミラスがボラー領の一部を切り取って建国されていた。ガルマン・ガミラスはボラーと暗黒の協定など知らないから、協定を無視して拡張してきたわけですね」

「我々としては」とランカンは言った。「ボラーが他国と結んだ協定や条約を引き継ぐ意志はありません。我々はボラーではありませんから。むしろボラーが作り出した秩序の全てを壊してしまいたい」

「一理はある」とグロイザー艦長はうなずいた。「だがそれでも我々に下された命令は、他国にくれてやる領宙は 1 光年たりともない……です」

「我々も同じです」とランカン艦長もうなずいた。

「それにも関わらず戦争は回避しなければならない」

「同感です」

「どうしたものか……」

「お互い、規則の特例を探しましょう」

しかし、そんなに都合の良い規則の特例などそう簡単に見つかるもので

はなかった。

第2回の交渉がスケジュールされ、暗黒星団帝国の交渉団は巡洋艦グロスターに戻って行った。

ランカンが艦長室の窓から近くに浮かぶ小岩塊を見ながらうめいた。

「何をうめいているのですか？」タラが言った。

「双方ともできれば戦争を回避したい。その思惑が一致した。積極的に話し合いもしてくれる。それはいい。だが、それによって事態は打開不能になった」

「どういう意味ですか？」

「撃ち合えば生き残った方が正義になる」ランカンは自嘲するように言った。「とても簡単だ。その原則で最前線ではみんなボラーと戦っている。だが、ここではできない。双方共に、戦争を回避したいからだ。だが、それゆえに規則のデッドロックは避けられない。引き裂かれそうだ」

「例外事項はないのですか？」

「ないよ。いや、あることはある。たとえば、彗星帝国の権益はアンタツチャブルなど書いてあっても、既にほとんど滅んでいる相手だぞ。次にアンドロメダ銀河から白色彗星が来るのがいつか誰も知らないというのに……」

「待って下さい」タラが言った。「たとえば、あの小岩塊が彗星帝国の権益だとすると国境線があれを回避してもいいわけですね？」

「この辺りに彗星帝国人などいない。いても、あんな値打ちもない岩塊の領有権など主張はしない」

「でも、もしあの岩塊に【ここは彗星帝国の版図なり】というペナントでも撃ち込んであったらどうします？」

「それは、国境線を曲げる口実にはなるが……。いや待てよ」

それから2回目の交渉が行われた。

今度は、ランカンが巡洋艦グロスターに出向いた。

「最初にお聞きしたい」とランカンは言った。「この岩塊が、もしも第3者が領有権を主張していた場合、国境線はどうなりますかな？」

「たとえば？」

「彗星帝国とか」

「関係ありませんな。それで国境線を変更することはありません」

「ダメですか」

「まあディンギルなら考えないこともありませんが」

「ディンギル？」

「狂信的な宗教集団でしてね。あれと戦うのは避けるというのが我々の規定の中にあります」

「ディンギルのものと判定する根拠は？」

「魔神像のマークです。こういうマークです」とグロイザー艦長はマークを説明した。

「では、そのマークがあの小岩塊にあったらどうでしょう」

「あれば、もちろんここを避けて国境線を引き直します。ですが、そんなものが無いことは既に確認済みです」

「グロイザー艦長。それは早計です。明日、もう一度確認してみて下さい」

「明日と言わず今すぐにでも再確認しますが」

「いえ。明日です。今日は調査してはいけません」

「ランカン艦長……どういう意味ですか？」

「明日の調査でそのマークは発見されるでしょう。同時に、彗星帝国の持ち物であるというペナントも発見されるでしょう。我が国は彗星帝国の権益には手を出さない規定があるので、国境線を引き直す。貴官も、ここにディンギルのマークを発見して国境線を引き直す。これで、国境線の交差は解消されるはずですよ」

「待って下さい。彗星帝国は既に駆逐された存在です。次の白色彗星がアンドロメダ星雲から来るまでは。意味などありません」

「意味は無くても古い規定はあるのです」

「それではまるで、古い規定で無理矢理国境線をねじ曲げるような……」

「お分かりになりませんか？」

次の瞬間グロイザー艦長の表情が変わった。

「なるほど。全て了解しました。本日は測量班全員を休暇とします。明日もう一度この岩塊を調査します。これでよろしいですね?」

「ご理解を感謝します」

ランカンは立ち上がって敬礼し、グロイザーも立ち上がって敬礼した。

巡洋艦タランがデスラーパレスに帰還した時、乗組員の一人が持っていた彗星帝国のペナントのイミテーションが1つ無くなっていた。

そのことに気づいた者はガルマン本国では誰もいなかった。

同様に巡洋艦グロスターがデザリアムに帰還した時、乗組員の一人が持っていたディンギルの魔神像のイミテーションが1つ消えていた。

そのことに気づいた者は暗黒星団本国では誰もいなかった。

ボラー連邦との全面戦争中のガルマン・ガミラスに暗黒星団帝国と事を構えるゆとりなどなく、地球侵攻準備中の暗黒星団帝国にガルマン・ガミラスと戦う余力はなかった。

それを思えば、ランカンもグロイザーも救国の英雄と言えた。だが、彼らの功績を知る者はほとんどおらず、彼らもけしてぺらぺらとは喋ろうとしなかった。喋ればトリックがばれるからである。

かくのごとく、現場の小数の知恵者が無益な戦争を回避したのである。

しかし、彼らの全てが二人の知恵者のように賢いわけではなかった。為政者がこざかしいトリックに溺れた暗黒星団帝国はしっぺ返しとして滅び、天変地異を想定しない華美な首都惑星を築いたガルマン・ガミラス帝国は異次元から出現した別銀河との接触であえなく滅んだのである。

おわり

解説

【アンリの日記】は、【アンリ・ファルマン】を【アンリ・ガルマン】に読み替えたら面白からうというというアイデアだけで書かれた。それだけでは物語にならないので、【アンネの日記】をもじった【アンリの日記】を登場させた。シャルバート信者への弾圧をユダヤ人になぞらえて書いているので、ガルマンとアンネの日記はとても合性が良いので採用した。

【タラン級巡洋艦危機一髪】は、WikiPedia のダイドー級のページを見ているときにタランの文字を見てビックリしたことで書き始めた。もちろん、良く見たら、【前級 タウン級軽巡洋艦】と書いてあるだけだった。そこで、逆にタラン級軽巡洋艦があると面白いなと思ったので書き始めた。そこで、タウン級にはグロスターという巡洋艦があることが分かったが、どう考えてもこの名前は暗黒星団帝国向きだ。そこで、グロスターという暗黒星団帝国帝国の巡洋艦も登場させることにした。タラン対グロスターである。しかし、両勢力は大戦争をやっていない。そこで、ガルマンが主張する国境線と暗黒が主張する国境線が食い違うという物語にした。いかにして戦いを回避して矛盾を解消するかの物語とした。

そして、この2短編をつなぐキーワードは【タラン】である。

艦長ランカンと副長タラの名前は【タラ・ダンカン】をもじってつけたが、理由は【タラ・ダンカン】を縮めるとタランと読めるからである。

C6248 の由来は特に説明しない。

ちなみに、タラン級の方が先に書かれているが、アンリの日記の方が先に掲載されている。時系列的にそちらが先だからだ。

遠野秋彦作品宣伝 2016/5/16 版

小説・超絶無敵ロボ オメガナイン殺人事件 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01DU7JXFM>

地球はヒーローにしか守れません。でも、基地で起こる殺人事件の犯人なら高校生でも追い詰められます。

小説・国際お助け隊 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01DVJCAIG>

東西冷戦の終結で職を失った女パイロットはバイクに乗って旅に出る

小説・電子出版殺人事件 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01E25PCNS>

電子出版黎明期、男達は電子出版の是非を激論する。

小説・電子商取引殺人事件 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01E380GO4>

デスマーチの開発プロジェクトを管理する女性は叫ぶ

小説・Windows 殺人事件 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01E565RCA>

1994 年当時の幻の短編 2 本【Windows 殺人事件】と【Windows 誘拐事件】が蘇る

小説・おなじい　～幼馴染の爺ちゃんはまだ恋に落ちていない～【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01EC86V1C>

冷凍睡眠から目覚めた未来は、謎に満ちていた

小説・クラッシャー象・連邦惑星サピンの危機【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01ECG523C>

凶悪犯罪者エレファントに名探偵シャドウが迫る

小説・火星の地底世界バルシダー　【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01ECYO3XO>

死んだオタクは未来の火星に転生した。

小説・女性新人社員よ人気 RPG 開発現場に突撃せよ【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01EDWY5IS>

勇んで乗りこんだゲーム開発現場は大惨状!?

小説・神さまインフレーション【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01EE8CUJW>

神さまが僕に何でも願いを叶えるゲームを提案してきた

遠野秋彦短編集 1 ・ フルボッコちゃん 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01EK6CXUY>

上司をフルボッコにする夢を叶えます